

コントロールとフェイズ

島 越 郎

1. はじめに

本稿では、非定形節 (non-finite clause) における主語の意味解釈について考察する。非定形節における主語は発音されないが、統語的に存在することを示す証拠が数多く指摘されている。例えば、二次述語 (secondary predicate) に基づく議論を見てみよう (Koster and May (1982), Chomsky (1986), Safir (1987, 1991), Landau (2010))。

(1) a. He served dinner angry at the guests.

b.* Dinner was served angry at the guests.

Landau (2013 : 72)

能動文 (1a) では形容詞句 *angry at the guests* が二次述語として生起し、主語の *He* を修飾する。他方、(1b) の受動文では動詞 *serve* の主語が文中に生起せず、二次述語が意味的に修飾できる要素が存在しない。この対比は、二次述語が修飾する要素は文中に必ず生起しなければならないことを示す。この様な二次述語の特性を踏まえて、次の用例を見てみよう。

(2) To serve dinner angry at the guests is bad manners.

Landau (2013 : 73)

この文では不定詞節 (infinitival clause) が主語を成し、また、不定詞節内に二次述語 *angry at the guests* が生起する。しかし、この二次述語が修飾する要素は文中に生起しない。(1b) とは異なり、(2) の二次述語の生起が許される理由は、不定詞節内の主語位置には発音されない主語 *PRO* が存在するためである。

- (3) [_{TP} PRO To serve dinner angry at the guests] is bad manners

構造 (3) において、不定詞節の主語である PRO を二次述語が修飾する。PRO の生起位置は非定形節の主語位置に限定されるため、(1b) の受動文には生起しない。そのため、(2) は許されるが、(1b) は許されない。

次の対比も不定詞節内の PRO の存在を示す。

- (4) a.* John pleaded with Mary₁ cheerful.
 b. John pleaded with Mary₁ to arrive cheerful.Landau (2013 : 73)

非文 (4a) は、二次述語 cheerful が前置詞の目的語を修飾できないことを示す。他方、(4b) では、不定詞節内の二次述語 cheerful が前置詞の目的語 Mary を修飾できる。この対比は、不定詞節の発音されない主語として PRO を仮定することにより説明できる。

- (5) John pleaded with Mary [_{TP} PRO to arrive cheerful]

非文 (4a) と同様に、(5) においても二次述語の cheerful は前置詞の目的語 Mary を直接修飾することはできない。しかし、(4a) とは異なり、(5) では不定詞節の主語 PRO が存在する。そのため、cheerful が PRO を修飾し、PRO が Mary を先行詞に取ることにより、cheerful は Mary を修飾することになる。このように、非定形節内に発音されない主語として PRO が統語構造に存在することが分かる。

非定形節内に PRO を仮定した場合、PRO の先行詞がどの様に決まるのかという問題が生じる。(2) における PRO は文中に生起する要素を先行詞とせず、任意の人を指すことから恣意的指示 (arbitrary reference) を持つ。また、(4b) における PRO は主節動詞 plead の目的語を先行詞に取る。生成文法においては、PRO とその先行詞の関係はコントロール現象と呼ばれ、この現象をどのように説明するのかが重要な問題の一つになっている。本稿では、この問題に対して、Chomsky (2000, 2001) で仮定されているフェイズ理論に基づく PRO の解釈条件を新たに提案する。

本稿の構成は次である。2 節では、非定形節が生起する統語位置により、PRO と先行詞とのコントロール現象が様々なパターンを示すことを概観する。3 節では、フェイズ

に基づく新たな PRO の解釈メカニズムを提案する。4 節では、本稿で提案する分析を支持する更なる議論を提示する。5 節は纏めとなる。

2. 説明すべきコントロール現象

非定形節が生起する統語位置により、PRO と先行詞のコントロール関係には相違点が見られる。まず、非定形節が動詞の目的語として生起する場合を見てみよう。

- (6) a. John hated to nominate himself.
 b.* Mary's colleagues hated to nominate herself.
 c.* Mary realized that John hated to nominate herself.

Landau (2013 : 29)

文 (6a) では、非定形節である不定詞節が動詞 hate の目的語として生起している。この場合、不定詞節を直接支配する定形節の項が PRO の先行詞として解釈される。(6a) の不定詞節を直接支配する定形節は文全体であり、文の主語である John が PRO の先行詞として解釈される。その結果、PRO を通じて John が男性形の再帰代名詞 (reflexive) である himself の先行詞となり、(6a) は許される。他方、(6b) では、女性形の再帰代名詞 herself は、John ではなく、Mary を先行詞に取らなければならない。しかし、Mary は不定詞節を直接支配する定形節の項ではない。(6b) における不定詞節を直接支配する定形節は文全体であり、文の主語である Mary's colleagues が PRO の先行詞として解釈される。そのため、複数形の colleagues が herself の先行詞になれず、(6b) は非文となる。同様に、(6c) の不定詞節を直接支配する定形節は従属節であり、従属節の主語 John が PRO の先行詞として解釈される。その結果、John は herself の先行詞になれず、(6c) も非文となる。¹

同様のパターンが副詞節として生起する非定形節にも見られる (Huettnner (1989))。

- (7) a. Our son should apologize after embarrassing himself.
 b.* Our son should apologize after embarrassing ourselves.
 c.* Mary thought that our son should apologize after embarrassing herself.

Landau (2013 : 31)

文 (7a) では、時を表す動名詞 (temporal gerund) が副詞節として生起している。この場合、副詞節を直接支配する定形節は文全体であり、文の主語である *our son* が副詞節内の PRO の先行詞として解釈される。その結果、PRO を通じて *our son* が再帰代名詞 *himself* の先行詞となり、(7a) は許される。一方、(7b) では、*ourselves* は、*our son* ではなく、その一部である *our* を先行詞に取らなければならない。しかし、*our* は副詞節を直接支配する定形節である文全体の主語ではなく、副詞節内の PRO の先行詞として解釈できない。その結果、PRO を通じて *our* は *ourselves* の先行詞になることができず、(7b) は非文となる。同様に、(7c) では、再帰代名詞 *herself* は、*our son* ではなく、*Mary* を先行詞にとらなければならない。しかし、*Mary* は副詞節を直接支配する定形節の項ではない。副詞節を直接支配する定形節は従属節であり、従属節の主語 *our son* が PRO の先行詞として解釈されるが、男性形の *our son* は *herself* の先行詞になれない。そのため、(7c) は非文となる。

このように、非定形節が動詞の目的語や副詞節として生起した場合、非定形節を直接支配する定形節内の項が非定形節の PRO の先行詞として解釈される。他方、非定形節が主語として生起した場合、同様の制限が非定形節の PRO に課せられない (Manzini (1983), Landau (2001))。

- (8) a. We thought that to expose herself would help Mary.
 b. We thought that to expose ourselves would help Mary.

Landau (2013 : 38)

- c. To have to feed himself would assist John's development.

Chomsky (1986 : 128)

文 (8a,b) では、不定詞節が従属節の主語として生起している。(8a) では、不定詞節を直接支配する定形節は従属節であり、その従属節の項である目的語の *Mary* が PRO の先行詞として解釈される。一方、(8b) では、不定詞節を直接支配する従属節の項ではなく、主節の主語 *We* が PRO の先行詞として解釈される。また、不定詞節が文全体の主語として生起する (8c) では、不定詞節を直接支配する定形節である文の目的語で

はなく、目的語の一部である John が PRO の先行詞として解釈される (Giorgi and Longobardi (1991), Williams (1992))。このように、主語として生起する非定形節の PRO の解釈は、非定形節が動詞の目的語や副詞節として生起する場合とは異なるパターンを示す。

以上、本節では、非定形節が生起する統語位置により、非定形節の主語である PRO と先行詞とのコントロール関係が異なるパターンを示すことを見てきた。次節では、このような振る舞いを示すコントロール現象に対してフェイズに基づく説明を試みる。

3. フェイズに基づくコントロール理論

本節では、PRO の意味解釈を決定する条件として (9) を提案する。

- (9) PRO は、意味解釈部門である LF に転送 (transfer) される段階で同一の転送領域内に PRO を束縛する要素が存在する場合、その変項 (variable) として解釈される。他方、同一の転送領域内に PRO を束縛する要素が存在しない場合、PRO は自由変項 (free variable) として解釈される。

この提案によると、PRO の解釈は派生のできるだけ早い段階で統語構造に基づいて決まる。また、転送領域を決めるフェイズに関して (10) を仮定する。

- (10) 非定形節を形成する CP はフェイズではない。

この仮定の下では、動詞句の vP と定形節の CP がフェイズを形成する。

提案 (9) と (10) の仮定に基づき、まずは、非定形節が動詞の目的語として生起する場合の派生を考えてみよう。本論の分析によると、(11a) は派生の段階で (11b) の構造を持つ。

- (11) a. John hated to nominate himself.
 b. [_{VP} John v [_{VP} hate [_{CP} Op C [_{TP} PRO₁ to [_{VP} t₁ v [_{VP} nominate himself]]]]]]]

構造 (11b) は、主節の動詞句 vP が形成された段階である。主節動詞 hate が選択する CP の指定部には空演算子 Op が生起する。(10) の仮定によると、(11b) において、PRO を含む転送領域は、不定詞節を形成する CP, TP, vP の先端 (edge) 以外に、主節の VP から成る。また、(9) の提案の下、この転送領域内で PRO は CP 指定部の Op により束縛され、Op の束縛代名詞として解釈される。そのため、転送後の LF において、CP 全体が λx . [x nominate himself] という一項述語として解釈される (Lebeaux (1984, 1985), Clark (1990))。CP 自体は主節動詞 hate の補部に生起するため、hate の語彙特性により、この一項述語の主語は主節主語の John として解釈される (Chierchia (1989))。その結果、(11a) における不定詞節内の PRO の先行詞は John となる。このように、非定形節が動詞の目的語として生起する場合、非定形節の主語である PRO の先行詞は、必ず主節動詞の項となる。そのため、(12) は許されない。

- (12) a.* Mary's colleagues hated to nominate herself.
 b.* Mary realized that John hated to nominate herself.

これらの文では不定詞節が動詞 hate の目的語として生起しており、(12a,b) の PRO は Mary's colleagues, John をそれぞれ先行詞に取る。その結果、不定詞節内の再帰代名詞 herself との人称が一致せず、これらの文は非文となる。

次に、非定形節が副詞節として生起する場合の派生を考えてみよう。(13a) は、派生の段階で (13b) の構造を持つ。

- (13) a. Our son should apologize after embarrassing himself.
 b. $[_{CP} C [_{TP} \text{our son}_1 \text{should} [_{vP} [_{vP} t_1 \text{apologize}] [_{CP} \text{after} [_{TP} \text{PRO}_2 [_{T'} \text{-ing} [_{vP} t_2 \text{embarrass himself}]]]]]]]]]$

この構造では、副詞節を形成する CP が vP に付加し、主節主語の our son が vP 指定部から TP 指定部へ移動している。(10) の仮定によると、(13b) における PRO を含む転送領域は、非定形節を形成する CP, TP, vP の先端に加え、主節 TP と主節 vP の先端から成る。(9) の提案の下、この転送領域内において PRO は主節主語の our son により束縛される。その結果、従属節内の動名詞の主語 PRO は、主節主語 our son の束縛

代名詞として解釈される。

このように、非定形節が副詞節として生起する場合、非定形節内の PRO は主節主語の束縛代名詞となり、それ以外の要素を先行詞とすることができない。そのため、(14) は許されない。

- (14) a.* Our son should apologize after embarrassing ourselves.
 b.* Mary thought that our son should apologize after embarrassing herself.

非文 (14a) では、主節主語の our son は PRO と同一の転送領域内にあり、PRO を束縛する。他方、our は PRO と同一の転送領域内に生起するが、PRO を束縛しない。その結果、PRO は、our ではなく、our son の束縛代名詞として解釈される。同様に、(14b) においても、非定形節の副詞節の PRO と同一の転送領域内にあり、かつ、PRO を束縛できる要素は、従属節の主語 our son である。そのため、PRO は our son の束縛代名詞として解釈されるが、副詞節内の再帰代名詞 herself の人称と一致しない。従って、(14) は非文となる。

最後に、非定形節が主語として生起する場合の派生を考えてみよう。(15a) は、派生の段階で (15b) の構造を持つ。

- (15) a. We thought that to expose herself would help Mary.
 b. $[_{CP} \text{ that } [_{TP} [_{CP} C [_{TP} \text{ PRO}_1 \text{ to } [_{vP} t_1 v \text{ expose herself}]]]]_2 \text{ would } [_{vP} t_2 v \text{ help Mary}]]]$

構造 (15b) では、従属節内において、不定詞節を形成する CP が vP 指定部から TP 指定部に移動している。(10) の仮定によると、(15b) における PRO を含む転送領域は、不定詞節内の CP, TP, vP の先端に加え、従属節の TP と vP の先端から成る。この転送領域内に PRO を束縛する要素は存在しない。その結果、(9) の提案の下、転送後の LF において PRO は自由変項として解釈される。PRO の値は、文脈により同一節内の目的語 Mary と決まる。(16) における非定形節内の PRO も自由変項として解釈される。

- (16) a. We thought that to expose ourselves would help Mary.

b. To have to feed himself would assist John's development.

これらの文では、非定形節が主語として生起するため、非定形節内の PRO と同一の転送領域内に PRO を束縛する要素は存在しない。そのため、転送後の LF において PRO は自由変項として解釈される。文脈により、(16a,b) では、PRO の値がそれぞれ *we* と *John* に決まる。

このように、(9) と (10) に基づく本論の分析は、非定形節の主語である PRO の解釈が非定形節が生起する統語位置により異なる事実を説明できる。次節では、本論が提案する PRO の解釈メカニズムが、その他の PRO の様々な特徴を捉えることができることを論じる。

4. 更なる帰結

4.1 焦点化

先ずは、*only* により焦点化された文に生起する PRO の解釈を考えてみよう。*Peter*, *Jane*, *Roy* の三人があるゲームをし、三人のうちで誰が勝つかを予想している状況を考えてみよう。この場合、それぞれ三人が自分自身が勝つと予想している状況を状況 A、また、三人が共に *Peter* が勝つと予想している状況を状況 B と呼ぶことにしよう。この二つの状況において、(17) の真偽値は異なる。

(17) a. Only Peter₁ claimed that he₁ was the winner.

b. Only Peter claimed to be the winner. Landau (2013 : 30)

従属節に定形節が生起する (17a) は、状況 A と状況 B の何れの場合も真となる。他方、従属節に不定詞節が生起する (17b) は、状況 A では偽となり、状況 B では真となる。

文 (17a) の意味が多義的である理由は、この文が次の二つの LF 構造を持つためである。

(18) a. Peter = only x [x claimed that x was the winner]

b. Peter = only x [x claimed that Peter was the winner]

構造 (18a) は, (17a) における代名詞 *he* が焦点句 *only Peter* により束縛されることにより得られる。この場合, 自分自身が勝つと主張しているのは *Peter* のみであり, 状況 B の意味を表す。他方, (18b) の構造は, (17a) における代名詞が指示代名詞の場合に得られる。この場合, *Peter* が勝つと主張しているのは *Peter* のみであり, 状況 A の意味を表す。このように, (17a) の代名詞は, 束縛代名詞と指示代名詞として解釈される。

他方, 本論の分析によると, (17b) は派生の段階で (19) の構造を持つ。

- (19) [_{VP} Only Peter v [_{VP} claimed [_{CP} Op C [_{TP} PRO₁ to [_{VP} t₁ v [_{VP} be the winner]]]]]]]

この構造では, 動詞 *claim* の目的語として生起する不定詞節内において, CP 指定部の Op が TP 指定部の PRO を束縛する。その結果, PRO は変項として解釈される。この束縛により, 不定詞節は一項述語として解釈され, LF において主節動詞 *claim* の項である *Peter* が一項述語の主語に決まる。その結果, 次の LF 構造が派生する。

- (20) Peter = only x [x claimed x to be the winner]

この構造において, PRO は *only* により焦点化された語句の変項として解釈される。その結果, (17b) は, 状況 A では偽となり, 状況 B では真となる。

非定形節が時を表す副詞節として生起する場合も (17) と同様の振る舞いを示す。*Peter, Jane, Roy* の三人が冗談に対して笑う状況を考えてみよう。具体的には, *Peter, Jane, Roy* の三人がそれぞれ自分が冗談を言った後で笑うという状況を状況 A とし, また, 三人共に *Peter* が冗談を言った後に笑うという状況を状況 B と呼ぶことにしよう。この二つの状況において, (21) の真偽値は異なる。

- (21) a. Only Peter₁ laughs after he₁ tells jokes.
 b. Only Peter laughs after telling jokes. Landau (2013 : 32)

副詞節が定形節である (21a) では, 状況 A と状況 B の何れの場合も真となる。これは, この文における *he* が束縛代名詞と指示代名詞として解釈されるためである。他方, 副

詞節が非定形節である (21b) では、状況 A では偽となり、状況 B では真となる。

本論の分析によると、(21b) は派生の段階で (22) の構造を持つ。

- (22) [_{CP} C [_{TP} only Peter₁ [_{VP} [_{VP} t₁ laughs] [_{CP} after [_{TP} PRO₂ [_{T'} -ing [_{VP} t₂ tell jokes]]]]]]]]]

この構造では、副詞節として生起する非定形節内の PRO が同一の転送領域内にある主節主語の Peter により束縛され、PRO の値は Peter に決まる。その結果、次の LF 構造が派生する。

- (23) Peter = only x [x laughs after x telling jokes]

この構造において、PRO は only により焦点化された語句の変項として解釈される。その結果、(21b) は、状況 A では偽となり、状況 B では真となる。

他方、非定形節が主語として生起する場合、PRO の解釈は異なる。Bill と Peter の二人が、自分たちの内のどちらの唄が Jane の印象に残るかを予想している状況を考えてみよう。Bill と Peter のそれぞれが自分の唄が Jane の印象に残ると予想している状況を状況 A とし、また、Bill と Peter の両方共に Bill の唄が Jane の印象に残ると予想している状況を状況 B とする。この二つの何れの状況においても、次の文は真と判断される。

- (24) Only Bill expected that reciting *The Tiger* would impress Jane.

Landau (2013 : 233)

この事実は、主語として生起する非定形節の PRO は、束縛代名詞と指示代名詞として解釈されることを示す。

本論の分析によると、(24) は派生の段階で (25) の構造を持つ。

- (25) [_{CP} that [_{TP} [_{CP} C [_{TP} PRO₁ to [_{VP} t₁ v reciting *The Tiger*]]]]]₂ would [_{VP} t₂ v impress Jane]]]

この構造において、従属節の主語として生起する非定形節の PRO と同一の転送領域内に PRO を束縛する要素は存在しない。その結果、転送後の LF において PRO は自由変項として解釈される。自由変項としての PRO が主節主語の Bill に束縛された場合、次の LF 構造が得られる。

(26) Bill = only x [x expected that x's reciting *The Tiger* would impress Jane]

また、自由変項の PRO が文脈により Bill を指す場合、次の LF 構造が派生する。

(27) Bill = only x [x expected that Bill's reciting *The Tiger* would impress Jane]

その結果、(24) の意味は多義的となる。

4.2 事象様相と自己知的様相

次に、事象様相 (de re) と自己知的様相 (de se) の観点から PRO の解釈を考えてみよう (Castañeda (1967), Chierchia (1990), Higginbotham (1992), Hornstein (1999, 2003), Landau (2000))。例えば、John が会社で使用するコンピュータが会社外部よりハッキングされ、会社の重要機密ファイルが John のコンピュータからコピーされたが、John 自身は自分のコンピュータが被害に遭ったことを知らないとしよう。そして、ハッキングされたコンピュータを使用していた従業員に対してどの様な処分を下すかを検討する緊急の会議が開かれ、その会議に出席した John が「問題のコンピュータを使用していた従業員に重い処分を下すべきだ」と発言したとしよう。この様な状況において、非定形節が動詞の目的語として生起する (28a) は偽となるが、副詞節として生起する (28b) や主語として生起する (28c) は真となる。

(28) a. John insists on being punished. Landau (2013 : 32)

b. John was furious mad despite being the careless worker himself.

Landau (2013 : 33)

c. John insists that being punished will prevent similar hacks in the future.

Landau (2013 : 234)

上記の状況において (28a) が偽として判断されるのは、(28a) における動名詞句の PRO が自己知的様相の解釈を持つことを示す。すなわち、動名詞句で表される「重い処分を受ける」という出来事に対して、主節主語の John が自覚している。そのため、John が自分のコンピュータが問題であることを知らない上記の文脈では、(28a) は偽と判断される。他方、(28b,c) が真として判断されるのは、これらの文における動名詞句の PRO は事象様相の解釈を持つことを示す。つまり、動名詞句で表されることに対して主節主語の John は自覚していない。その結果、John が問題の張本人であることを知らない上記の文脈において、(28b,c) は真と判断される。このように、事象様相と自己知的様相に関して、動詞の目的語として生起する非定形節の PRO の解釈は、主語や副詞節として生起する非定形節の PRO とは異なる振る舞いを示す。

本論の分析によると、(28a) は派生の段階で (29) の構造を持つ。

(29) [_{VP} John v [_{VP} insists on [_{CP} Op C [_{TP} PRO₁ being [_{VP} v [_{VP} punished t₁]]]]]]]

この構造では、主節動詞 insist on の目的語である動名詞句の主語 PRO は、CP 指定部の Op により束縛されることにより、動名詞句全体は一項述語となる。動名詞句自体は insist on の補部に位置するため、主節動詞との語彙的含意関係により一項述語の主語は insist on の主語である John に決まる。更に、insist on の語彙特性により、一項述語の主語は自己知的様相の解釈を持つ。²

他方、(28b,c) は派生の段階で (30a,b) の構造を持つ。

(30) a. [_{CP} C [_{TP} John₁ was [_{VP} [_{VP} [_{AP} t₁ furious mad]]] [_{CP} despite [_{TP} PRO [_{TP} -ing [_{VP} be the careless worker himself]]]]]]]
 b. [_{CP} that [_{TP} [_{CP} C [_{TP} PRO₁ being [_{VP} v [_{VP} punished t₁]]]]]₂ will [_{VP} t₂ v [_{VP} prevent similar hacks in the future]]]]]

構造 (30b) では、従属節の主語である動名詞句内の PRO は、CP 指定部の Op により束縛されず、自由変項として解釈される。この場合、主節動詞 insist on との語彙的含意関係で自由変項の解釈が決まるわけではなく、文脈により PRO の先行詞が John に決まる。同様に、(30a) においても、副詞節内の PRO は主節主語 John により束縛される

が、主節述語 *mad* との語彙的含意関係により PRO の解釈が決まるわけではない。その結果、(28b,c) の PRO は事象様相の解釈を持つ。

4.3 潜在項

最後に、動詞の目的語、主語、副詞節のいずれの位置に生起する不定詞節にも共通して見られる PRO の特徴を考えてみよう。まず、動詞の目的語に生起する不定詞節の PRO は、文中に生起しない潜在項 (implicit argument) を先行詞に取ることができる (Bresnan (1982), Bouchard (1984), Huang (1989), Sag and Pollard (1991), Dalrymple (2001))。

(31) John said/shouted to behave oneself. Landau (2013 : 176)

この文では、不定詞節が動詞 *said/shouted* の目的語として生起する。これらの動詞は、主節主語の John 以外に、発音されない潜在項として与格項 (dative argument) を取る。この場合、潜在項である与格項が恣意的解釈を持ち、この与格項が不定詞節の主語である PRO の先行詞となる。その結果、不定詞節内の再帰代名詞 *oneself* は PRO を通じて潜在項である与格項を先行詞に取り、(31) は許される。

副詞節として生起する不定詞節においても、PRO は潜在項を先行詞に取ることができる (Bach (1982), Nishigauchi (1984))。

(32) a. Here's *Bambi* to read to your children.
b. The university should provide a decent library to work in.

Landau (2013 : 224)

文 (32a,b) では、不定詞節が目的を表す副詞節 (purpose clause) として生起する。これらの文における不定詞節の PRO は、主節の潜在項を先行詞に取る。つまり、(32a) では「本を受け取る者」が、また、(32b) では「図書館を利用できる大学の学生」が、それぞれ PRO の先行詞として解釈される。

潜在項が PRO の先行詞になる用例は、動名詞句が主語として生起する場合にも見られる (Postal (1970))。

- (33) a. Going there was fun/foolish/amusing/unwise.
 b. Criticizing oneself fairly was difficult. Landau (2013 : 175)

これらの文における動名詞句の主語は不特定の事物を意味し、また、主節の述語が取る潜在項と一致する。例えば、(33a)では、「そこに行った者は楽しんだ」、「そこに行く者は賢く無かった」という解釈を持ち、動名詞句の主語が文全体の述語の潜在項として解釈される。同様に、(33b)では、述語 *difficult* の潜在項が動名詞句の主語として解釈され、「自分自身を批判する者にとって、そのような行為は困難であった」という解釈が得られる。このように、非定形節の PRO は、どのような統語位置に生起するのであれ、主節述語の潜在項を先行詞に取ることができるという点において共通の特徴を示す。

本論の分析によると、(31)は派生の段階で(34)の構造を持つ。

- (34) [_{VP} John v [_{VP} said/shouted [_{CP} Op C [_{TP} PRO₁ to [_{VP} t₁ v [_{VP} behave oneself]]]]]]]

この構造では、不定詞節内の PRO が CP 指定部の Op により束縛され、不定詞節は一項述語となる。この述語の主語は、主節動詞 *say* や *shout* との語彙的含意関係により、与格項が一項述語の主語となる。但し、(34)の場合、与格項が統語構造に具現化しない。そのため、(31)における不定詞節内の PRO の先行詞は文中に生起しない。³

また、(32b)では、主節の目的語 *a decent library* が不定詞節内の前置詞の目的語に対応する。この文は、派生のある段階で次の構造を持つ。

- (35) [_{VP} the university v [_{VP} [_{VP} provide a decent library] [_{CP} Op₁ [_{TP} PRO to work in t₁]]]]]

この構造では、主節の動詞句 vP が形成されている。また、不定詞節 CP が VP に付加し、不定詞節内において空演算子 Op が前置詞 *in* の目的語位置より CP 指定部に移動している。Op 移動により形成された一項述語と主節の目的語 *a decent library* が相互に C 統御する関係にあり、一項述語の主語が *a decent library* に決まる。この段階において、フェーズ v の補部全体である VP が転送領域となる。この転送領域内において PRO を束縛する要素は存在しない。そのため、PRO は自由変項として解釈され、文脈上の話題となっ

ている大学の学生が先行詞となる。

同様に、動名詞句が主語として生起する (33b) においても、動名詞句内の PRO を含む転送領域内に、PRO を束縛する要素が存在しない。その結果、PRO は自由変項として解釈される。また、LF において、述語 *difficult* の潜在項が前置詞句 PP としてスプラウトされると仮定しよう (Chung, Ladusaw and McCloskey (1995))。この場合、(33b) は次の LF 構造を持つ。

(36) $[_{CP} [_{TP} PRO \text{ Criticizing oneself fairly was difficult } [_{PP} P DP]]]$

この構造に対して、存在閉包 (existential closure) が適用し、潜在的な存在量化詞 (existential quantifier) により自由変項としての PRO とスプラウトされた前置詞句内の名詞句 DP が束縛されることにより、次の構造が得られる。

(37) $[_{CP} \exists x_1 [_{TP} PRO_1 \text{ Criticizing oneself fairly was difficult } [_{PP} P DP_1]]]$

この構造は、「自分自身を批判する者にとって、そのような行為は困難であった」という解釈を表す。その結果、動名詞句の主語と *difficult* の潜在項が同一の恣意的解釈を持つ。

5. ま と め

本稿では、非定形節内の発音されない主語 PRO とその先行詞との関係であるコントロール現象について考察した。具体的には、非定形節内の発音されない主語である PRO の意味解釈を決定する条件として (38) (= (9)) を提案した。

(38) PRO は、意味解釈部門である LF に転送 (transfer) される段階で同一の転送領域内に PRO を束縛する要素が存在する場合、その変項 (variable) として解釈される。他方、同一の転送領域内に PRO を束縛する要素が存在しない場合、PRO は自由変項 (free variable) として解釈される。

この条件と非定形節を形成する CP はフェーズではないと仮定することにより、非定形

節が生起する統語位置により異なるコントロール現象が見られる事実に対して統一的説明を試みた。

注

* 本稿の一部は日本学術振興会科学研究費補助金（基礎研究（C）課題番号 17K02803）の援助を受けている。

- 1 動詞の目的語に生起する不定詞節内の PRO が、不定詞節を直接支配する定形節の項ではない要素を先行詞に取る場合がある。

(i) Mary saw that John gestured/signaled to position herself further to the left.

Landau (2013: 176)

この文において、不定詞節内の目的語である herself が、John ではなく、Mary を先行詞に取る。この場合、動詞 gesture や signal が不定詞節以外に発音されない潜在項を選択し、その潜在項が主節主語である Mary を先行詞に取ると考えられる。

- 2 動詞の目的語に生起する全ての不定詞節の PRO が自己知的様相の解釈を持つわけでない。例えば、下記の用例における PRO は自己知的様相の解釈を持たない。

(i) a. John managed to avoid the draft (because he spent that decade in a coma).

b. Mary neglected to spend the payment.

Landau (2013: 34)

従って、動詞の目的語に生起する不定詞節内の PRO が自己知的様相の解釈を持つかどうかは、不定詞節を選択する動詞の語彙特性により決まると考えられる。

- 3 次の文においては、動詞 said/shouted の与格項が to Mary として顕在化している。

(i)* John said/shouted to Mary to behave oneself.

Landau (2013: 177)

この場合、PRO の先行詞は Mary となるが、Mary は再帰代名詞 oneself の先行詞になれない。その結果、(i) は非文となる。

参 考 文 献

- Bach, Emmon (1982) "Purpose Clauses and Control," In *The Nature of Syntactic Representation*, Pauline Jacobson and Geoffrey K. Pullum (eds.), 35-57, Dordrecht: D. Reidel Publishing Company.
- Bouchard, Denis (1984) *On the Content of Empty Categories*, Dordrecht: Foris.
- Bresnan, Joan (1982) "Control and Complementation," *Linguistic Inquiry*, 13, 343-434.
- Castañeda, Hector-Neir (1967) "Omniscience and Indexical Reference," *Journal of Philosophy* 64, 203-210.

- Chierchia, Gennaro (1989) "Structured Meanings, Thematic Roles and Control," In *Properties, Types and Meanings II*, Gennaro Chierchia, Barbara Partee and Raymond Turner (eds.) 131-166, Dordrecht : Kluwer Academic Publishers.
- Chierchia, Gennaro (1990) "Anaphora and Attitudes *De Se*," In *Semantics and Contextual Expression*, Renate Bartsch, Johan van Benthem and Peter van Emde Boas (eds.), 1-32, Dordrecht : Foris.
- Chomsky, Noam (1986) *Knowledge of Language : Its Nature, Origin and Use*, Westport, CT : Praeger.
- Chomsky, Noam (2000) "Minimalist Inquiries : The Framework," *Step by Step : Essays on Minimalist Syntax in Honor of Howard Lasnik*, ed. by Roger Martin, David Michaels, and Juan Uriagereka, 89-155, MIT Press, Cambridge, MA.
- Chomsky, Noam (2001) "Derivation by Phase," *Ken Hale : A Life in Language*, ed. by Michael Kenstowicz, 1-52, MIT Press, Cambridge, MA.
- Chung, Sandra, William Ladusaw, and James McCloskey (1995) "Sluicing and Logical Form," *Natural Language Semantics* 3, 1-44.
- Clark, Robin (1990) *Thematic Theory in Syntax and Interpretation*, London : Routledge.
- Dalrymple, Mary (2001) *Lexical Functional Grammar*, San Diego, CA : Academic Press.
- Giorgi, Alessandra, and Giuseppe Longobardi (1991) *The Syntax of Noun Phrases : Configuration, Parameters and Empty Categories*, Cambridge University Press.
- Higginbotham, James (1992) "Reference and Control," In *Control and Grammar*, Richard Larson, Sabine Iatridou, Utpal Lahiri and James Higginbotham (eds.) 79-108, Dordrecht : Kluwer Academic Publishers.
- Hornstein, Norbert (1999) "Movement and Control," *Linguistic Inquiry* 30, 69-96.
- Hornstein, Norbert (2003) "On Control," In *Minimalist Syntax*, Randall Hendrick (ed.) 6-81, Oxford : Blackwell Publishing.
- Huang, C.-T. James (1989) "Pro-Drop in Chinese : A Generalized Control Theory," In *The Null Subject Parameter*, Osvaldo Jaeggli and Kenneth J. Safir (eds.) 185-214, Dordrecht : Kluwer Academic Publishers.
- Huettner, Alison K. (1989) *Adjunct Infinitives in English*, Doctoral dissertation, University of Massachusetts.
- Koster, Jan and Robert May (1982) "On the Constituency of Infinitives," *Language* 58, 117-143.
- Landau, Idan (2000) *Elements of Control : Structure and Meaning in Infinitival Constructions*, Dordrecht : Kluwer Academic Publishers.
- Landau, Idan (2001) "Control and Extraposition : The Case of Super-Equi," *Natural Language and Linguistic Theory* 19, 109-152.
- Landau, Idan (2010) "The Explicit Syntax of Implicit Arguments," *Linguistic Inquiry* 41, 357-388.
- Landau, Idan (2013) *Control in Generative Grammar*, New York : Cambridge University Press.
- Lebeaux, David (1984) "Anaphoric Binding and the Definition of PRO," In *Proceedings of North Eastern Linguistic Society* 14, Charles Jones and Peter Sells (eds.), 253-274, UMASS, Amherst, MA : GLSA Publications.
- Lebeaux, David (1985) "Locality and Anaphoric Binding," *The Linguistic Review* 4, 343-363.
- Manzini, M. Rita (1983) "On Control and Control Theory," *Linguistic Inquiry* 14, 421-446.
- Nishigauchi, Taisuke (1984) "Control and the Thematic Domain," *Language* 60, 215-250.
- Postal, Paul M. (1970) "On Coreferential Complement Subject Deletion," *Linguistic Inquiry* 1, 439-500.
- Safir, Ken (1987) "The Syntactic Projection of Lexical Thematic Structure," *Natural Language and Linguistic Theory* 5, 561-601.
- Safir, Ken (1991) "Evaluative Predicates and the Representation of Implicit Arguments," In *Principles and Parameters in Comparative Grammar*, Robert Freidin (ed.), 99-131, Cambridge, MA : MIT Press.
- Sag, Ivan and Carl Pollard (1991) "An Integrated Theory of Complement Control," *Language* 67, 63-113.

(18)

コントロールとフェイズ (島)

Williams, Edwin (1992) "Adjunct Control," In *Control and Grammar*, Richard Larson, Sabine Iatridou, Utpal Lahiri and James Higginbotham (eds.) 297-322, Dordrecht : Kluwer Academic Publishers.

Control and Phase

Etsuro SHIMA

Missing subjects of nonfinite clauses display different properties, depending upon syntactic positions of those clauses. When they appear in complements of verbs or as adjuncts, their subjects are interpreted as arguments of the clauses immediately containing the nonfinite clauses. In contrast, if nonfinite clauses appear as subjects, the antecedents of their subjects need not be grammatical elements: they can be interpreted contextually or generically. In generative grammar, the dependency between missing subjects and their antecedents is called control and various approaches to control have been proposed. In this paper, within the framework of Chomsky's (2000, 2001) phase-based theory of syntax, I will propose the control theory that determines interpretation of missing subjects of nonfinite clauses as soon as phases have been formed in the course of derivations.